

池上良正『津軽のカミサマ

——救いの構造をたずねて——』

どうぶつ社 (1987年 1,800円)

奥山倫明

宗教学とは何かについて考察を加えることは、宗教とは何かを研究する上でも意義あることと思われる。ところが宗教学についての全体像を描き出すのは、なかなか容易なことではなさそうだ。

さしあたり方法と対象ということで考えると、一つに、方法にではなく、対象に規定される学問として宗教学を捉える見方がある。この見方によると、宗教学は方法の上での独自性を欠くの引き換え、およそ人間にかかわるすべての学問の成果を流用できるだろう(このことを特徴と考えることも可能だ)。その浅薄さを嘆くのか、あるいは身軽さを誇るのかは人それぞれである。他人の目を意識しすぎるのはよくないが、あまり独善的にならない程度の感受性は必要にちがいない。もっとも、対象である「宗教」とは何かについて、少なくとも何らかの枠組をあらかじめ設定すべきだということになれば、問題はそれほど簡単ではない。定義は到達目標ではあるが、密かにでもそれを持たずして出発はできないはずである。

さて宗教学に方法論を求めない立場がある一方で、そうした立場に対して疑問や不安を抱く人もいる。本書の著者、池上良正氏もその一人である。

本書は標題の通り、津軽地方にいるカミサマと呼ばれる人たち、つまり神を拝み神的な能力を認められた民間の祈禱者を対象としている。カミサマという対象が、様々な学問分野から注目されている状況にあって、宗教学者である著者は「どうしても『宗教学』という立場へのこだわりを捨てるわけにはいかない」という。では、宗教学の立場とはどのようなものか、池上氏の宗教学へ寄せる「想

い」ともいえるようなひとつの観点が、本論に入るに先立って読者に示される。

いわば現場偏重主義とは距離をおきつつも、著者は宗教学の立場にも現場は必要であるとする。そこでは「当事者たちが『宗教』であり、『信仰』であると自覚するものにむかって、必死に、真剣に取りくんでいる」。著者自身のことばを引用しよう。

「必死に、真剣に、などというのは、いかにも曖昧な表現だ。『必死さ』や『真剣さ』をどう測定しますか、などと問われると困ってしまう。しかし、必死で真剣な現場というのはやはりあるのだ、と思いたい。たとえばそれは、『客観的』な視点から『科学的』な分析をめざして入りこんだはずの研究者に対して、少なからぬ衝撃を与えるほどの迫力を備えた現場である。……(中略)……研究者が、現場に生きる人たちの迫力に強い衝撃を受け、彼らがこだわりつづけている価値の正体を何としてでも見とどけてみたいという、主体的な関心を失ってしまったら、宗教学の立場は崩壊するといってもよいだろう。」(p 13, 傍点は引用者による。)

ここには必死で真剣な信仰の現場が存在することを前提にしようとする著者の信念が読みとれる。その背景には、宗教的現場との、より正確には津軽のカミサマたちとの幸運な出会いがあったに違いない。著者と同一の出会いを経験することは望むべくもないが、宗教学の立場として著者が重視する当事者自身の主観的世界は、確かに忘れてはならないだろう。

当事者の主観的世界に到達し、それに依拠しようとする現場重視の姿勢について一つ注意しておきたい。それはその目的を重んずる

あまり、研究が当事者の常識的世界の記述のみに終始する可能性のあることだ。「宗教誌(史)」としてはそれも意義があるだろうが、少なくとも宗教学は何らかの意味での資料の整理・体系化を目標とするものである。その面で宗教学の方法論への関心を表明する著者に読者は期待するだろう。本書はその期待に答える労作であり、現場を共有しない者も本書から理論的な枠組みを含め多くを学ぶことができるはずである。

ところで先の引用において、研究者の対象への主体的関与が積極的に評価されていた。ここで連想されるのは、研究者の立場とその研究の目的とに関連する、研究者の信仰の有無、宗教的関与についての古くて新しい問題である。「大事なのは、自分がどの立場で宗教学を学ぶのかをはっきり自覚し、公言すること」だとして、著者は津軽のカミサマ信仰に対して、「部外者として、しかも特定の宗教を信奉しているとはいいがたい者として接近する」ことを言明する。

そうした立場に立って対象に接近する著者は、本書の目的を、現場に携わる当事者たちの真剣な信仰世界を、できる限りこわさないように注意しながらも、部外者として部外者の人たちにも理解できる言葉で翻訳することだという。扱われる信仰の現場は、特定の地域、時代における文化の個別性の中での、人間のトータルな営みの場である。したがって個別性を個別性において捉え、しかもいわゆる「科学的厳密性」を多少犠牲にしようとも、人間の全体像を映し出せる視点が確保されねばならないとされる。

必死さや真剣さにいかにして出会うかについてと同じく、ここでも翻訳する際の「気づかい」についてこれ以上は語られていないのは残念である。だが、そうした物足りなさであっても、自らの研究の立場と目的とを、謙虚な限定を加えつつ自覚的に明確化する著者の姿勢には、学問の世界における誠実さともいべきものが感じられる。

本書は、「研究者仲間だけの議論はやめて、一般読者に語りかけるように」との要請を受

けて、特に宗教的自覚の薄い部外者を対象に書き下ろされたものだけに、本論においても平易な表現で著者の姿勢を示すことに成功している。第一章「カミサマの世界」で津軽のカミサマ信仰の、カミサマに対する一般庶民の信仰を中心とする概略を紹介し、第二章「救いの構造」および第三章「先祖とホトケ」において、主題である「救い」を考察している。著者により翻訳された「救いの構造」を、そこで用いられた枠組みを中心に簡単に概観してみよう。

そもそも救いとは何か。言葉自体が多義的で曖昧であり主観的要因に大きく規定されているという難点を認めた上で、津軽のカミサマ信仰の世界に即して著者は「救いの文化論」の展開を目指す。「本来の救済」を追求する規範論や本質論ではないことは本書の大きな特色であり、一貫して市井の人にとっての救いを追究し意義深い。カミサマが依頼者の「救い」を実現するために動員する観念群を、著者は三つの基本的テーマに整理する。第一に「運命」、第二に「共苦共感の神々」、第三に「こぼみ」である。

「運命」とは、人間の意志を越えて外在しながら、所与の実体として捉えられる、超(非)人格的な「規則性」、あるいは「筋書き」のことである。依頼者は問題の個別性に対応する独自の判断を要求しており、示される各人の「運命」も個別で独自なものとなる。運命観に内在する救いの機能として、心理的には個人の責任の運命への転嫁による負担の軽減と人格の保護、社会的には対人関係の亀裂の防止があげられている。

次にカミサマ信仰の礼拝対象について考えると、それは大きく「神」と「ホトケ」の二つのカテゴリーに類別できる。「ホトケ」とは死者一般を指し、「神」とはそれ以外の祀るに値する超人間的存在のすべてを指すという。この二分法も制度的・教義的分類によるのではなく、カミサマ信仰の現場から抽出されたものである。カミサマや依頼者・信者たちがさまざまな神々に対してさまざまな願望や苦悩をもちかけるカミサマ信仰の考察には

有効と思えない、神の存在と神観念の存在を前提とする本体論的見方を著者は退ける。依頼者・信者たちの神々へのかかわり方そのものに注目すると、カミサマ信仰での救いは「共苦共感世界の実現」という特徴をもつという。カミサマを仲介に、相互に「甘え」と「察し」を求めあう神々と依頼者・信者とが、個別的に情緒的な融和を達成するのである。個別的情緒や利己的願望がある程度まで認められる個別世界のなかで、かえって内発的な自責感が生まれ、さらには態度変容への道も開かれるという。

本体論偏重への反省は本書の基調の一つであり、後段の先祖・ホトケ観をめぐっての、カミサマ信仰から他界観・靈魂観を追究する行き方が批判的に取り上げられる箇所も啓発的である。

ところで現実生活においては、第一、第二のテーマを越える災因論が求められる場合もある。不幸の究極因を作り出す否定的情緒作用そのものを表すのが、第三のテーマ「こぼみ」である。それは共苦共感の世界の挫折に由来しており、したがってその解消方法も「赦い」「成敗」など「切り捨て型」よりは、「懺悔」「供養」など和解を求め、共苦共感の世界を修復する「抱き込み型」が適合している。

さて、「運命」「共苦共感の神々」「こぼみ」という「救い」の実現に関わる三つのテーマについて説明した上で、著者はそれらからより一般的な原理への抽象化を試みる。そもそも津軽地方に観察される事例を現代人の信仰として捉え、そこから日本の社会や文化の諸問題を考えたいというのが著者の大きな意図であった。確かに個別研究は同時に比較研究に包摂されるものといえるから、「救い」の通文化的比較研究の座標軸としてのモデル化は大胆ではあるが非常に意義がある。先の三つのテーマから、ここに<Ⅰ. 超人格的必然作用>、<Ⅱ. 性善的な人格作用>、<Ⅲ. 性悪的な人格作用>の三原理が抽出される。カミサマ信仰における「救い」のモデルは、三原理それぞれが相対化され、しかも各々の

関係もまた相対化された構造であるという。対比の意味で、著者はキリスト教における「救いのモデル」も考察している。モデル自体の有効性に合せ、比較研究に際しての適合性についても、今後の各方面での議論を期待したい。

あえて一つ疑問を記すと、「人格作用」という術語は、性善的作用を及ぼすものとしての超人間的・超俗的な神々や、性悪的作用を及ぼすものとしての靈的存在から抽出されたモデルを示すのに適切だろうか。それこそ本体論的観点からの疑問なのかもしれないし、拙稿でも明確ではないが、「人格」「超人格」「非人格」等の汎用される概念についての説得的な説明を望みたい。

次に著者は、カミサマ信仰の救いを考える上で不可避の残されたテーマへと議論を進める。そのテーマとは「先祖・ホトケ」、あるいは災因論として用いられる「先祖・ホトケの因縁罪障」といった観念群である。これらは「甘え」と「察し」の文化に適合して根強い社会的支持基盤を持っており、先の三つの基本原理と重なりあう構造をもっているという。

すなわち<超人格的必然作用>については、先祖と子孫との何らかの結びつきから先祖に直接・間接に由来する「想い」が子孫に及び、「障り」「因縁罪障」として現れるという根強い考え方があてはまる。ここでは先祖と子孫を結ぶ絆は「運命」的な必然と受け取られている。さらに<性善的・性悪的人格作用>の面からいうと、子孫とともに苦しむ先祖は、みずからを「察して」くれる共苦共感者を求めさまよう死者である。したがってその「こぼみ」(負的作用)を解消するには主に「抱き込み型」の手段が選ばれ、それにより先祖・ホトケは情緒的葛藤を超越した神的存在へと引き上げられ、子孫との共苦共感の世界を回復することになる。

「生霊」「のろい」「狐つき」などの「こぼみ」災因論のある種の反社会性と比べ、確かに「先祖・ホトケ」災因論は近代社会に適合的であろう。また先祖やホトケの認識から身近な人間関係への内省に導かれ、自己の態度

変容に至ることもあるだろう。こうした著者の見解はたいへん興味深いのだが、評者には若干不明瞭な点もあった。カミサマたち自身の印象によると、近年、災因論に占める「先祖・ホトケ」の割合が高くなってきているというが、これを歴史的变化と読んでよいのだろうか。「先祖・ホトケ」の質的、量的な重要性の証言が引用されているが、時間的変化を指摘するものは一例のみである。他方、勘のよいカミサマのなかには「こばみ」災因論の反社会性を「それとなく感じとっている人が多いようだ」ったり、そのテーマに「過度に依存することへの危険性を察知しているようである」そうだが、著者のこの判断の根拠が読者にはわかりにくいように思われる。

(pp.177-178)

ともあれこうして著者は、「運命」「共苦共感の神々」「こばみ」の三テーマとそれらに重なるモデルとしての「先祖・ホトケ」のテーマとを抽出しつつ、そのモデルに照らしながらカミサマ信仰の救いの世界を描き出した。その特徴を今一度確認しておこう。

『共苦共感世界』の実現を理想とし、『甘え』と『察し』の文化に適合したカミサマ信仰の『救い』のテーマの特質は、あくまで基本モデルの徹底的な相対化であり、相互の相対的關係のなかにある。(p.185)

本書全体の記述を通じ、カミサマ信仰の相対主義のいわば復権がなされたといえるだろう。その企図が、「甘え」と「察し」の文化に移植された個人主義をめぐる、今日的な問題関心とともにあることも忘れてはなるまい。

最後に「結びにかえて」と題して著者の提示したのは、「シャマニズム研究への一視点」である。依頼者・信者の「救い」の問題へ関心を寄せる著者は、ここでも祈禱者の神秘体験の性格やそこに現れる靈魂観の類型に固執することなく、一般庶民のカミサマに対する信仰という局面に視点をすえ、そこに展開されるひとつの信仰形態としてシャマニズムを位置づけようとする。シャマニズム信仰は次のように仮説的に定義されている。

「特定の人間には、神、精霊、死霊等との

即時的で直接的な交感や一体化を通して、それらの意思を媒介したり、それらの作用を統御できる能力があるとする観念にもとづいて、かかる能力を行使する人間と、単数ないし複数の信者とのあいだに、一定の信仰行動が実修されるような信仰形態の総称」(p.200)

本書は生きている信仰現象としての〈シャマニズム信仰〉を、「救い」実現の問題から検討したものということになる。そこからは依頼者の個別性を確保し回復させる「個別性回復のエージェント」としてのカミサマの姿が浮かび上がる。無個性化、画一化に向かう社会の流れの中で、個別性の回復が「救い」の切実なテーマになりつつあるとすれば、津軽のカミサマのようなシャマニズム的祈禱者が「救い」の力を発揮する余地はなお大きいというのが著者の見通しである。

相対的で個別主義的な救いにはその限界があり、いわゆる高等宗教に絶対的で普遍主義的な救いを求める人もいようだろうことは、著者も認めている。そこではこれら二種類の救いの優劣のつけ難さが述べられているが、その難しさは当然だろう。なぜなら個別적であれ、普遍的であれ、ともに救いとして重要であるはずだからだ。それらは、優劣の判断にはなじむものとは思えない。両者が二者択一のように対比される現状があるのなら、宗教におけるその両立の可能性を問うてもみたくなる。

神学的議論に入らずともよい。そもそも一体、宗教の救いの中で先の二種類はどのように区別されるのか。おそらく本書の中では「現世利益」と「高度に精神的な慰め」との関係についての議論の辺りにヒントが隠されていたはずだ。(p.82)

さらに言えば、カミサマ信仰に限らないだろう「ひとりの救われた信者の背後に、その何倍もの救われなかった人がいる」ことを踏まえた上で、宗教における救いとは何かをあらためて問うという課題もある。

「救いの文化論」を目指す著者が、救いとは何かについて仮説的にでも定義することを

避けたのは、戦略とはいえ心残りである。カミサマ信仰の救いを特徴づけるからには、著者にも救いの概念についての何らかの枠組みが前提されていたのではなかろうか。「救いの文化論」と「救いの本質論」とは、そのどちらを目指すにせよまったく無関係であり続けることはできないだろう。「救いの構造」をめぐる議論は、どうやら救いの定義の問題に戻らざるを得ないように思われる。もっとも戻るとはいっても、そこは出発点と同じ所ではない。読者は宗教学における「救い」の問題について、本書に導かれて螺旋階段を一

巡ってきたのであって、それは少しばかり著者の描くカミサマ信仰の「救い」の過程 (pp.186-187) に似ていなくもない。

著者の特に部外者に読んでもらいたいとの言葉に甘えて、一通り印象を述べてきた。本書は堅実な個別研究であると同時に、理論構築への志向の下に「救いの構造」を抽出し、さらに今後避けることのできない学説上の諸問題点の箇所を数多く指摘したものであり、近年の宗教学の成果の一つとして高く評価されるべきものと思われる。著者、池上良正氏の今後の研究の進展を期待したい。